



教える勉強法

神戸大学 経済経営研究所
准教授 榎本 正博

勉強法として、他人に教えてみるのが有効な方法としてあげられている。最近読んだ菅広文著『身の丈にあった勉強法』(幻冬舎)で、クイズ番組等で活躍している宇治原史規氏が、受験勉強の時に教えているつもりで説明する練習をしていたことが記されている。またお金(給料)をもらって教えることが、その準備と説明方法を考えることを通じて内容を体系的に理解するため一番身につくともいう。私たち大学教員は多かれ少なかれ教えることの有効性は身をもって経験しているであろう。

私の専門は財務会計で、企業の会計データを使って実証分析をしている。大学院在籍時は主に会計学と統計学の授業に出席していた。よく誤解されるのだけれども、会計データを使った実証分析は、財務諸表が読めればできるので、会計基準を詳しく知っている必要はない。大学院での会計学の授業は論文の読解を主とした内容であり、財務会計を教育するための教育を受けることなく大学に教員として赴任した。

赴任後も財務会計の授業は担当せず、経営分析とか情報処理の授業を担当していたので、そちらばかり詳しくなり、それにかまけて財務会計の勉強が多少おろそかになっていた。すると榎本ゼミの学生は会計をロクに知らないという噂が流れていることを、同僚の会計学の教員から知らされた。同僚は同時に私の会計の知識を疑っている。これはまずい、なんとかしなければと思っているうちに会計大学院の教員として呼びがかかった。そんな噂のある状態から、公認会計士を目指す学生に財務会計を教える教員として赴任しなければならなくなった。おまけに連結会計の教科書を書く羽目になり、さらに窮地に陥る。財務会計の知識のアップデートをサボったツケが来て、異動してしばらくの間、塗炭の苦しみを味わった(このあたりに何を研究していたかさっぱり覚えていない)。その後、必死になって勉強して資料作りで知識を整理し、授業で教えてアウトプットするというサイクルがうまく回り、不思議なもので2-3年たつとほぼしの財務会計担当教員らしくなった上、榎本は会計基準に明るいというその数年前まではあり得ない評判までついてきた。そのときお金をもらって教えるとはなるほどうまい学習法だと実感した。

さて、最近しばらくぶりに別の「教えて学ぶ」サイクルに巡り会った。小学生の息子が学習塾に通いだしたのだが、国語の点がもうひとつである。そこで私が塾の補講のようなことをすることにした。父の威厳を示すにはまず自身の実力を見せつけねばならない。30年ぶりに国語(現代文)の問題を解いてみた。得意だった現代文、しかも小学生の問題な

ど楽勝のはず・・・が思いのほか難しい，というより息子と同じところで引っ掛け問題に足を取られ，主人公の気持ちはわからず散々な結果に終わった。このまま引き下がるのは腹が立つので，息子が塾から帰るなり宿題を取り上げ，問題を解き，解説で確認して教えるというサイクルをひたすら繰り返した。所詮は小学生レベルのはずで，なんとかならないはずがないという気持ちだけが支えである。塾のインターネット配信で授業も見られるが，それは悔しいので見ない。この負けん気がわずかでも研究に生かされていれば，私の研究者人生は多少マシになっていたに違いない。

さて半年後，宿題レベルはほとんど間違えなくなった。主人公の気持ちなど手に取るようにわかる。模擬テストを試しに解いてみたが解答する前から出題の意図が読み取れる。半年前に同じような点を取っていた息子とは歴然の差がついている（息子の名誉のために言うと，国語の点はだいぶ良くなった）。息子は大人だから当たり前だと主張する。しかし，半年前の実力は同じで，その後の使用した問題集も全く同じなのだから，他の要素を無視すれば，私と息子の違いは教えているということしかない（その上，私は塾の授業を聞いていない）。そう言って丸めこみ，私が解説する方針を変え，息子には解いたうえで解答への道を説明させることにした。宇治原氏の経験通りであり，かつ私の体験を継承できるなら，これで万事うまくいくはずである。今後，息子の国語の点がどうなっていくかは次回の執筆時にお知らせしたい。